

## STI 感染不安のある若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究分担者：合田 友美 (宝塚大学看護学部 准教授)  
研究協力者：松高 由佳 (比治山大学現代文化学部 准教授)  
田邊 雅章 (大阪府健康医療部保健医療室医療対策課)  
新海 のり子 (大阪府健康医療部保健医療室医療対策課)  
吉田 英樹 (大阪市保健所 所長)  
村中 康一 (大阪市保健所感染症対策課)  
松川 幸子 (大阪市保健所感染症対策課)  
浦林 純江 (大阪市保健所感染症対策課)  
山脇 慎介 (大阪市保健所感染症対策課)  
櫻井 理恵 (大阪市保健所感染症対策課)  
真木 景子 (大阪市保健所感染症対策課)  
久保 徹朗 (大阪市保健所感染症対策課)  
松村 直樹 (元大阪市保健所感染症対策課)  
萬田 和志 (アルバコーポレーション)  
中村 圭奈子 (アルバコーポレーション)  
古林 敬一 (そねざき古林診療所)  
研究代表者：日高 庸晴 (宝塚大学看護学部 教授)

### 研究要旨

近年、わが国では梅毒をはじめとする性感染症の流行が確認されており、国民一般における HIV/STI の知識の普及および検査受検勧奨の推進が喫緊の課題となっている。このような中、HIV/STI の感染不安を抱く若者男女の特徴を捉えることは、性感染症の流行拡大防止に大いに寄与できると考えた。そこで、エイズ予防啓発のための基礎資料を得ることを目的に、HIV/STI 検査の受検者を対象に質問調査を行い、性交相手との出会いの経緯や HIV/STI に関する知識・認知、予防に関する行動と認識等の背景要因を探索した。

調査対象は、①西日本の A 府または A 市自治体における HIV/STI 検査を 2017 年 10 月～2018 年 12 月に受検した人、および②B 社の HIV/STI 郵送検査を 2017 年 12 月～2018 年 5 月に受検した人、③C クリニックにおける HIV/STI 検査を 2018 年 11 月～2019 年 3 月に受検した人、で、回収数は①17,159 人、②863 人、③245 人であった。

本調査より、HIV/STI の感染不安を抱く若者男女の特徴として以下が明らかとなった。

- 1) HIV/STI 検査について自治体での受検者、郵送検査の受検者、クリニックでの受検者は、いずれも 20 代の占める割合が特に高率であった。
- 2) 男女が性交相手と出会う経緯 (6 ヶ月以内) として最も多かったのは、自治体検査では「友人・知人の紹介」であり、「インターネット」と続いた。一方、郵送検査を受検した男性では「お金を払った」が高率で、女性では「インターネット」利用による出会いが多かった。また、「クラブ」は 20 代の若者の出会いの場であり、他年代と比べ明らかな差を認めた。
- 3) 「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある」と回答した人は 10 代～30 代の女性が多く、「(過去 6 か月間に) 相手へお金を払ってセックスをしたことがある」と回答した人は男性が多く自治体検査では年齢が上がるほど高率であった。
- 4) 毎回コンドームを使用している人は自治体、郵送検査共に女性で特に低率で、一般男女全体でみる

とコンドームを使用しない理由として最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」があった ( $p < 0.05$ )。

- 5) 「(過去6か月間の)コンドームの使用」について、「必ず使った」CSWは30.4%、非CSWは24.3%で、使用目的として「性感染症予防」を使用目的としたCSWは91.2%、非CSWは66.4%で有意差を認めた ( $p < 0.05$ )。
- 6) 自治体検査において、10代56.8%、20代60.5%と半数以上の女性が「(過去6か月間の)性交相手とのコンドーム使用に関する話題にしている」一方で、約2割の女性が「つけて(つけよう)って言えないから仕方ない」と使用をあきらめていた。
- 7) 「(過去6か月間の)コンドーム所持率」をみると「すぐに使えるようにいつも身近に持っていた人」の割合が高いのは10~20代の男性で、3割以上が常時携帯していた。一方、20~30代の女性の所持率は低く、5割以上の女性が「持っていなかった」と回答しており、男性に比べ女性の所持率は顕著に低かった ( $p < 0.01$ )。
- 8) 郵送検査受検者のうち、「いずれかの性感染症に罹患したことがある」男女は全体の2割を超え、なかでも女性の罹患率(36.1%)が高率であった。このうち罹患歴がある性感染症で最も多いのは「クラミジア」(31.7%)で20代の3割以上に罹患歴があった。なお、クリニックにて受検したCSWのうち「いずれかの性感染症に罹患したことがある」人は8割以上にのぼり、なかでも「クラミジア」(79.3%)が最多であった。
- 9) 性感染症に関する知識の取得状況として、正答率が最も低い項目は、郵送検査受検者において「HIVの治療薬には1日1錠の内服で効果を発するものがある」、クリニック受検者のうちCSWにおいて「HIV検査には、その日のうちに結果が分かるものがある」、非CSWにおいて「HIVは、感染すると死にいたる」と異なる傾向を示した。
- 10) クリニック受検者へ「HIVまたは性感染症検査の受検を妨げる理由」として、非CSWの男性では「診断されるのが怖い」が約5割、「時間がない」が約3割を占め、10代20代で有意に高率であった ( $p < 0.05$ )。他方、非CSWの女性では「経済的な負担」「診断されるのが怖い」がそれぞれ2割を占めた。

## A. 研究目的

近年、わが国では梅毒感染者が急激に増加し全国で患者数は5,000人を上回っている。以前はMSMの罹患が注目されていた性感染症も、今や一般男女間の感染拡大防止が喫緊の課題となっている。しかしながら、一般男女のうちHIV/STI感染のリスクが高いと考えられる性行動が活発な若者を対象にした研究は未だ十分とはいえない。

そこで、本研究では、HIV/STI感染リスクが高い一般若者男女を抽出する一つの方法として、感染への不安を抱きA府またはA市自治体、B社(郵送検査)、CクリニックにおいてHIV/STI検査を受検した人を対象に質問調査を実施した。そして、MSM(Men who have sex with men)を「生涯の性交相手が同性、または同性および異性である男性」、WSW(Women who have sex with women)を「生涯の性交相手が同性、または同性および異性である女性」と操作的に定義し、10~30代の一般男女(MSM以外の男性、WSW以外の

女性)を主要ターゲットとして背景要因を分析し、その特徴を明らかにした。

本調査における質問の内容は、基本属性、性交相手との出会いの経緯やHIV/STIの症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識とその実際、HIV/STI検査の受検歴、性感染症の既往歴等とした。

## B. 研究方法

### 1. 調査時期、対象および調査項目

#### 調査1：自治体検査受検者調査

調査期間は2017年10月~2018年12月。調査対象は、A府またはA市自治体が実施しているHIV/STI検査(以下、自治体検査)の受検者17,159人である。調査項目は、属性(年齢、性別、性交経験の有無、HIV/STI検査の受検歴、HIV/STI感染既往の有無)、金銭授受による性交の有無、性交相手と出会った経緯、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由などである。

## 調査2：郵送検査受検者調査

質問紙の配布期間は2017年12月～2018年5月。調査対象は、B社が販売しているHIV/STI郵送検査（以下、郵送検査）受検者である。調査項目は、属性（年齢、性別、居住地、結婚の有無、性交経験の有無、HIV/STI検査の受検歴、HIV/STI感染既往の有無）、性交相手と出会った経緯、HIV/STIの知識、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由、効果的だと考える性感染症予防の啓発方法などである。

## 調査3：クリニック受検者調査

調査期間は2018年11月～2019年3月。調査対象は、Cクリニックを受診しHIV/STI検査を受検した245人である。調査項目は、属性（年齢、性別、職業、性交経験の有無、HIV/STI検査の受検歴、HIV/STI感染既往の有無）、金銭授受による性交の有無、性交相手と出会った経緯、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由、今後かかるとする病気、受検動機や受検を妨げる理由などである。

## 2. 分析方法

分析にあたり、集団の偏りを考慮して調査1、2では図1、2、の通り分析対象を抽出した。「性交経験のある」者を限定して、自身の性別、性交相手の性別が「無回答」の者、性別で「その他」を選択した者を分析対象から除外。「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の男性」をMSM、「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の女性」をWSWと操作的に定義して、MSM、WSW、MSMを除く男性（以下、男性）、WSWを除く女性（以下、女性）をそれぞれ抽出した。今回はサンプル数の偏りを考慮して、MSM、男性、女性の3群を対象に年代毎の差異を確認し、10代から30代の一般男女（男性および女性）を中心にその特徴を検討した。

調査3では、CSWと非CSWの2群に分けて分析。サンプル数の限界を考慮して、対象者が回答した性別を採用し男性、女性を対象に年代毎の差異を確認するとともに、10代から30代を中心にその特徴を検討した。また、金銭授受による性交に着目し、お金を払った人を抽出しその傾向を探った。

基本統計量の算出には、IBM SPSS

ver25.0(Windows)を用い、 $\chi^2$ 検定をおこなった。有意水準は5%未満とした。

本研究は、宝塚大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

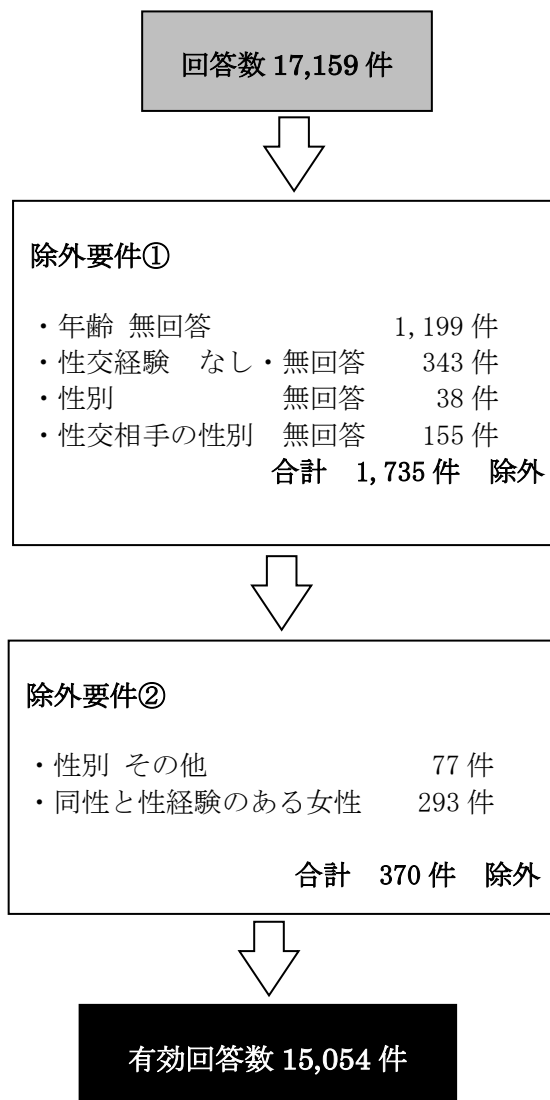


図1. 自治体検査受検者における分析対象者抽出の過程

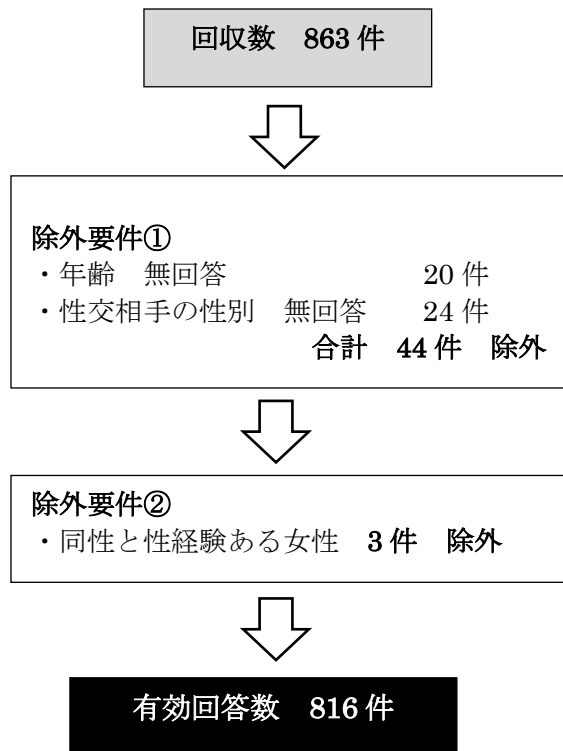


図 2. 郵送検査受検者における分析対象者抽出の過程

## C. 研究結果

### 調査 1：自治体検査受検者調査

#### 1. 回答者の分布

本研究の回収数は 17,159 件で、有効回答数は 15,054 件 (87.7%) であった。年齢、性別の分布を表 1 に示す。

回答者の年齢分布をみると、最低年齢 15 歳、最高年齢 87 歳 (平均年齢 35.2 歳) で 20 代が 38.3%、30 代 27.5% を占め、10 代～30 代で全体の約 7 割を占めた。10 代は、女性 169 人 (51.4%)、男性 103 人 (31.3%)、MSM 57 人 (17.3%) と女性が高率であったが、その他はすべての年代で男性の占める割合が高かった。

性別では男性 8,122 人 (54.0%) 女性 3,858 人 (25.6%) MSM 3,074 人 (20.4%)。女性の受検者の約半数を 20 代が占めており、若者女性の受検率の高さが明白となった。一方、男性においても 20 代、30 代がそれぞれ約 3 割を占めており、若者男性の受検率の高さが示された。なお、40 代以降では、MSM の占める割合が女性の占める割合を上回っていた。

#### 2. 性交相手との出会いの経緯 (表 2)

「性交相手との出会いの経緯」は年代により有意な差 ( $p < 0.05$ ) を認め、10 代～30 代の一般男女の「性交相手と出会いの経緯 (6 ヶ月以内)」で最も多いのは「友人・知人の紹介」であり、「インターネット」と続いた。「友人・知人の紹介」で出会う男女の割合は、10 代～20 代において約 3 割であり、40 代以降が 2 割以下であるのに比して高率であった。他方、10 代の一般男女の「インターネット」利用 (27.9%) は 50 代以降 (16.6%) の約 2 倍を占めた。なお、MSM の 10～30 代は「インターネット」での出会いが 7 割以上を占め、10 代では 84.2% と著しく高く、特に異なる傾向を示した。さらに、「クラブ」は 20 代男女の約 1 割の出会いの場となっており、他年代と比べ明らかな差を認めた ( $p < 0.01$ )。

「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある」男女は 696 人 (5.8%) で、このうち女性は 571 人と 8 割以上を占めた。「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある」男女が性交相手と知合う経緯は、「性風俗店」474 人 (68.1%) が多数を占め、「SNS や出会い系サイト」は約 2 割に留まっていた。ただし、10 代の女性では、「お金をもらってセックスをした」相手と「SNS や出会い系サイト」で出会う機会が特に多く、35.0% を占めた。

「(過去 6 か月間に) 相手へお金を払ってセックスをしたことがある」男女は 4449 人 (37.1%) で、このうち男性が大半を占め、年代が上がるほど有意に高率であった ( $p < 0.01$ )。そして、男性は「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある」125 人に対し、「相手へお金を払ってセックスをしたことがある」4,407 人と圧倒的に多く 35 倍にのぼった。なお、10～30 代の男女が「相手へお金を払ってセックスをした」相手と知り合う経緯は、「性風俗店」が 9 割以上を占めた。

MSM では、「相手へお金を払ってセックスをしたことがある」人が 16.4%、「相手からお金をもらってセックスをしたことがある」人が 5.6% を占め、相手からお金をもらった 10 代の出会いの経緯は唯一「SNS や出会い系サイト」が高率で、「性風俗店」の 3 倍であった。

### 3. HIV 検査または HIV 以外の性感染症検査の受検と罹患 (表 3、4)

「いずれかの性感染症に (過去に) 罹患したことがある」男女は全年代で 2,588 人 (21.6%) を占め、なかでも女性の罹患率は 29.3%で男性 17.9%に比して高率であった。さらに、女性を年代別にみると 50 代の 34.6%が「罹患経験がある」と回答し最も高率であり、10 代は 23.1%と最も低率であった。

「(過去に) HIV 検査を受検したことがある」男女は 10 代 51 人 (18.8%)、20 代 1,647 人 (35.9%)、30 代 1,695 人 (52.5%) で年齢を重ねるほど受検経験のある人の割合率が高くなる傾向にあった。そして、20 代までは経験者の割合が未経験者の割合を下回っている一方で、40 代以上は経験者が 6 割を超えており、年齢を重ねるほど再受検率が高くなる傾向にあった ( $p < 0.01$ )。また、過去の受検時期をみると、「過去 6 ヶ月以内」が有意に高率であり ( $p < 0.01$ )、中でも 10 代男女は 64.7%と高く、短期間で受検を繰り返す傾向にあることが示唆された。

今回の受検理由として「性風俗店の利用による感染」を心配している男女の割合は、男性 44.3%、女性 6.8%、MSM 12.7%で男性は有意に高率であった ( $p < 0.01$ )。

### 4. 感染予防と背景要因 (表 5)

「毎回コンドームをつけている」男性は 27.9%、女性は 20.0%、MSM は 26.1%で全ての性別で 3 割を下回っており、特に女性が低率であった。年代別にみると、男性では 10 代 (33.0%) が最も使用率が高く、女性においても同様に 10 代 (25.4%) の使用率が高率であった。男性がコンドームを使用しない理由で最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」 (31.0%) で、10~30 代に比して 40 代以降の選択率が高率 ( $p < 0.05$ )。次いで「妊娠を希望するから使わない」 (15.1%)、「今まで大丈夫だったから、今回もきっと大丈夫」 13.8%と続いた。一方、女性では、「妊娠を希望するから使わない」と回答した人が 20.4%で最も多く、30 代において 28.9%と有意に高率であった ( $p < 0.01$ )。この他「コンドームを使わない方が一体感がある」 18.1%は年代による差はなく、「今まで大丈夫だったから、今回もきっと大丈夫」 16.1%は

10 代が 22.5%と特に高かった ( $p < 0.01$ )。また、10 代 56.8%、20 代 60.5%の女性が「(過去 6 か月間の) 性交相手とのコンドーム使用に関する話題にしている」一方で、「つけて (つけよう) って言えないから仕方ない」と回答した女性は 16.4%で、男性 2.1%に比して有意な差があり、「つけて (つけよう) って言えないから仕方ない」と使用をあきらめている若者女性の存在が明らかになった。一方、「話題にしていない」のは男性 (54.1%) に多く女性、MSM の約 1.5 倍を占めた。さらに、「過去 6 か月間において性交相手と HIV/STI 感染症の予防について話題にしたか」を問うた結果、「話題にした」と回答した人は男性 (19.6%) に比して女性 (36.0%) に多く、40 代男性は話題にしない人の割合が 73.3%と特に高率であった。

「(過去 6 か月間の) コンドーム所持率」をみると「すぐに使えるようにいつも身近に持っていた人」の割合が最も高いのは 20 代男性 (35.9%) で、次いで 10 代男性 (32.0%) が高率であった。一方、「持っていなかった人」の割合が最も高いのは、30 代女性 (56.7%) であり、20 代女性 (56.3%) が続き、男性に比べ女性の所持率は顕著に低かった ( $p < 0.01$ )。

## 調査 2 : 郵送検査受検者調査

### 1. 回答者の分布

本研究の回収数は 863 件で、有効回答数は 816 件 (94.6%) であった。年齢、性別、居住地、婚姻の有無について、分布を表 6 に示す。

回答者の年齢分布をみると、最低年齢 15 歳、最高年齢 77 歳 (平均年齢 34.5 歳) で 20 代が 40.7%と最も多く、20 代~30 代で全体の約 7 割を占めた。MSM 100 人 (12.3%)、男性 514 人 (63.0%) 女性 202 人 (24.8%) で男性が多くを占めた。このうち 10 代は女性の割合が多いが、20 代以降は男性の占める割合が高く、20 代は男性が女性の約 1.5 倍で、30 代では 3 倍以上と男女比が大きく異なっていた ( $p < 0.01$ )。また、居住地は関東 (含山梨) が最も多く、男性の 22.8%、女性の 19.8%が該当した。

婚姻の有無では、男女の 69.3%は未婚者で、一般男女を比較すると男性 67.5%に比して、女性は 73.8%と未婚率が高く、年代毎にみると 29 歳未満の男女の未婚者の割合は、88.8%と特に高

率であった。

## 2. HIV 検査または HIV 以外の性感染症検査の受検と罹患 (表 7、8、9)

「(過去に) HIV 検査を受検したことがある」男女は 10 代 3 人 (27.3%)、20 代 91 人 (30.8%)、30 代 94 人 (47.5%) で 30 代までは各年代の半数以下であるものの、40 代 76 人 (60.8%)、50 代 49 人 (56.3%) は半数を超えており、年代により有意な差を認めた ( $p < 0.01$ )。「(過去に) HIV 検査を受検したことがある」男女の受検場所の内訳をみると、いずれの年代も「(過去に) 郵送検査を受検した」人数が「(過去に) 保健所で受検した」人数と「(過去に) 病院・クリニック・診療所を受診した」人数の倍以上を占めた。

他方、「(過去に) HIV 以外の性感染症検査を受検したことがある」男女は 10 代 2 人 (18.2%)、20 代 126 人 (42.7%) と 20 代までは各年代の半数を下回った。それに比して、30 代 100 人 (50.5%)、40 代 79 人 (63.2%)、50 代以上 52 人 (59.8%) と 30 代以降では 5 割を超えていた ( $p < 0.01$ )。

そして、「いずれかの性感染症に (過去に) 罹患したことがある」男女は全年代で 182 人 (25.4%) を占め、なかでも女性の罹患率は 36.1% と高率であった。さらに、性別と年代別にみると 20 代および 30 代の女性の罹患率が高率で、罹患したことのある性感染症の種類について内訳をみると、「クラミジア」が最も多く 30 代女性の 40.0%、20 代女性の 33.3% に罹患歴があった。

「周りの友人や知り合いに HIV/STI に感染している人がいると思うか」を男女に問うた結果、「いる」または「いると思う」と答えた人の割合は全体の約 1 割で、20 代 30 代にやや多い傾向にあった。

## 3. 性交相手との出会いの経緯 (表 10)

男性の「性交相手と出会ったきっかけ (6 ヶ月以内)」で最も多いのは、「お金を払った」51.0% で、年代別の割合をみると 10 代～30 代よりも 40 代以降の方が高率であった。

一方、女性では、「インターネット」が出会いの機会として最も高率で 25.7% を占め、年代別にみると 10 代と 50 代の女性は特に高く、男性の 3 倍以上を占めた。そして、「職場」21.8%、

「友人・知人の紹介」19.3% と続き、「お金をもらった」が 18 名 (8.9%) で、「お金をもらった」女性の年代別割合をみると、10 代 (11.1%)、20 代 (10.3%) が高率であった。なお、「性交相手と出会ったきっかけ (6 ヶ月以内)」で「お金を払った」と回答した人はおらず、明らかな性差を認めた。

さらに、「クラブ」と回答した男女は 35 人 (4.9%) で 20 代から 30 代が大半を占め、男性よりも女性に高率で合った。

## 4. 感染予防と背景要因 (表 7、9、11)

HIV/STI 感染について相談できる相手が「いない」と回答した男女は 385 人 (53.8%) と半数を超えており、誰にも相談できずに受検に至っていた。また、相談できる相手が「いる」と答えた者の内訳をみると、どの年代でも「友人」が最も多かった。

「コンドームを使わない理由として思い浮かぶ言葉」を選択してもらったところ、男性では、「コンドームをつけない方が一体感がある」31.3% であり、「毎回コンドームを使っているので、あてはまらない」23.7% が続いた。一方、女性では、「妊娠を希望するから使わない」20.3% が最も多く、「コンドームをつけない方が一体感がある」「今まで大丈夫だったから」がそれぞれ 19.8%、「つけようって言えないから、仕方ない」「毎回コンドームを使っているので、あてはまらない」がそれぞれ 19.3% であった。

性感染症に関する知識の取得状況では、「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」について、男女ともに正解率が 8 割以上と高く、10 代の男性と 50 歳以上の女性の正答率が低率であった。その一方で、「過去 5 年間に日本で感染報告数が 5 倍以上増加した性感染症は梅毒である」の正解率は男女全体で 53.4% であり、10 代、20 代の男女と 50 歳以上の女性の正答率は 5 割を下回っていた。さらに、「HIV の治療薬には 1 日 1 錠の内服で効果を発するものがある」では正答率が 23.3% と特に低率であり年代間で有意な差があった。

## 調査 3 : クリニック受検者調査

### 1. 回答者の分布

本研究の有効回答数は 245 件で、性別の内訳

は、男性 109 人 (44.5%)、女性 136 人 (55.5%) であった。さらに、年代毎にみると 10 代 2 人 (0.8%)、20 代 84 人 (34.3%)、30 代 68 人 (27.8%)、40 代 62 人 (25.3%)、50 代以降 29 人 (11.8%) で 20 代の占める割合が最も多かった。

有効回答を CSW と非 CSW の 2 群に分けて分析すると、CSW は 96 人 (39.2%)、非 CSW は 149 人 (60.8%) で非 CSW の占める割合が高かった。CSW の属性をみると、最低年齢 20 歳、最高年齢 59 歳 (平均年齢 38.2 歳) で 40 代が 33.3% と最も多く、20 代~30 代で全体の 53.2% を占めた。性別では、男性 3 人 (3.1%) 女性 93 人 (96.9%) でうち既婚者は 16 人 (17.2%) であった。また、「過去 3 か月間に提供した性風俗サービスの種類」は「派遣型ファッションヘルス」が 37.5% と最も多く、続いて「ソープランド」30.2% が多かった。一方、非 CSW では、最低年齢 18 歳、最高年齢 65 歳 (平均年齢 34.4 歳) で 20 代が 40.9% と最も多く、20 代~30 代で全体の 67.7% を占めた。性別では、男性 106 人 (71.1%) 女性 43 人 (28.9%) で大半が男性、女性の職業はアルバイトやフリーターが多く、男性では会社員が 7 割を占めた。

## 2. HIV 検査または HIV 以外の性感染症検査の受検と罹患 (表 14、20)

「(これまでに) HIV 検査を受検したことがある」人は、CSW と非 CSW で有意な差を認め ( $p < 0.01$ )、CSW の方が高率であった。CSW の受検経験あり者は 20 代 73.9%、30 代 96.4% で、年齢により有意差を認めた ( $p < 0.01$ )。非 CSW でも年代による有意差があり ( $p < 0.01$ )、10 代 50.0%、20 代 49.2%、30 代 75.0% に受検経験があった。そして、「(これまでに) HIV 感染症 (エイズ) に感染したことがある」CSW は 5 名 (5.7%) であり、非 CSW は 1 名 (1.1%) の 5 倍であった。

一方、「(これまでに) HIV を除く性感染症検査を受検したことがあるか」の問いについても、CSW、非 CSW 間で有意差を認め ( $p < 0.01$ )、CSW の年齢分布は、20 代 91.3%、30 代 100% で、非 CSW は 10 代 50.0%、20 代 63.9%、30 代 80.0% であり、HIV 検査の受検率を上回っていた。そして、「性感染症の罹患歴」では、「いずれかに感染したことがある」CSW は 85.9% にのぼり、なかでも

「クラミジア」(79.3%) が最も多く淋菌感染症 (53.3%) が続いた。これに対し、非 CSW で「いずれかに感染したことがある」と回答したのは 73.9% で、CSW を 10 ポイント以上下回った ( $p < 0.05$ )。罹患した性感染症の種類では、CSW と同様に「クラミジア」(52.3%) が最も高率で、次いで淋菌感染症 (24.3%) が多かった。最も罹患の多い年代は CSW では 40 代、非 CSW では 30 代であり、異なる傾向を示した。

## 3. 性交相手とコンドーム使用 (表 16、22)

「(過去 6 か月間に) セックスをした相手の人数」は、CSW では「10 名以上」が最も多く 67.7% を占めた。一方、非 CSW は「2~3 人」(32.2%) が最も多く、「10 名以上」と回答した人は 26.2% に留まっていた。また、「(過去 6 か月に) セックスした相手」として CSW では、「(生風俗店の) 客」が 87.3% と最も多く、「恋人や配偶者など特定の相手」は 50.6% と半数であった。これに対し非 CSW は「恋人や配偶者など特定の相手」が 57.9% と半数を超えて最も多く、「友人やセフレ」が 40% を占めており、男性の 32.7% は、「(自分が) お金を払った相手」と回答していた。なお、CSW が「性風俗サービスを提供した相手の 95.8% は「母国語が日本語」であり、「(過去 3 か月間に) 性風俗サービスを提供した相手の延べ人数」は、「101 人以上」(24.0%) が最多であった。

「(過去 6 か月間の) コンドームの使用」について、「必ず使った」と回答した非 CSW は 24.3% で「性感染症予防」のための使用 (避妊と性感染症予防の両方を目的とした人を含む) は 72.9% であった。これに比して「必ず使った」CSW は 30.4% と高率で、「性感染症予防」のための使用 (避妊と性感染症予防の両方を目的とした人を含む) は 91.2% とかなり高率であった。一方で、「全く使わなかった」と回答したのは、非 CSW 12.9%、CSW が 13.9% と大差はなかった。そこで、CSW の「(過去 3 か月間の) 性風俗サービス提供時のコンドーム使用」について問うた結果、51.0% が「自分が準備したコンドームを使用」し、45.8% が「ホテルに備え付けのコンドームを使用」しており、CSW が「使用しなかった理由」で最も多いのは、「コンドームを使用する必要のないサービスだから」(54.2%) で、「コ

ンドームを使わない理由」として、「仕事だから」(47.3%)と回答する人が約半数を占めた。これに対し、非CSWで最も多い回答では「コンドームをつけない方が気持ちいいから」(46.2%)が約半数であり、次いで、「コンドームが手元になかったから」が25.5%、「一体感がほしかったから」(22.6%)と続いた。

#### 4. 感染予防と背景要因 (表 15、21)

「今後かかると思う病気」について問うた結果、「がん」と「HIV以外の性感染症」の2項目でCSWと非CSWの2群間で有意差を認めた ( $p < 0.05$ )。また、年代による差はなく回答率が高い順にみると、CSWでは「インフルエンザ」(61.5%)の次に「HIV以外の性感染症」(47.9%)と続き、「HIV感染症」は10.4%であった。これに比して、非CSWでは「がん」が(57.0%)が最も高率で、「インフルエンザ」(55.7%)と続き、「HIV以外の性感染症」は26.2%、「HIV感染症」は11.4%に留まっていた。

「HIVまたは性感染症検査を受けようと思うとき」についてトップ3をみると、非CSWの男性では、「体の不調を感じた時」(50.9%)、「パートナーがHIVまたは性感染症になったとき」(43.4%)、「HIVまたは性感染症についてのニュースや記事を読んだとき」(22.6%)があがったが、非CSWの女性では、「定期的」(55.8%)、「体の不調を感じたとき」(39.5%)、「人生の節目」(30.2%)と、異なる傾向を示した。さらにCSWでは、「定期的」が74.0%と多数を占め、「パートナーがHIVまたは性感染症になったとき」(22.9%)は年代によって有意な差を認め ( $p < 0.05$ )、「体の不調を感じた時」(21.9%)が約2割いた。このようにCSWと非CSWでは、受検動機が異なっていた。

なお、「HIVまたは性感染症について心配なことがあるときの対応」で最も多いのは、非CSW、CSW共に「病院を受診する」であり、「病気についてインターネットで調べる」が続いた。一方で、「HIVまたは性感染症検査を受けるのを妨げる理由として最も多いのは、CSWで「経済的な負担がある」25.0%で30代以降に有意に高率であり ( $p < 0.05$ )、次いで、「診断されるのが怖い」19.8%があった。そして、非CSWの男性では、「診断されるのが怖い」45.3%が特に高率であり、

「時間がない」28.3%も約3割を占め、10代20代で有意に高率であった ( $p < 0.05$ )。他方、非CSWの女性では、「経済的な負担がある」「診断されるのが怖い」がそれぞれ20.9%を占めた。

性感染症に関する知識の取得状況では、CSWで最も正答率が低い項目は「HIV検査には、その日のうちに結果が分かるものがある」(正答率32.3%)であり、非CSWでは「HIVは、感染すると死にいたる」(40.3%)の正答率が低かった。CSWと非CSWの正答率で有意な差 ( $p < 0.01$ )を認めた項目は「HIV検査には、その日のうちに結果が分かるものがある」の1問のみで、CSWの方が、正答率が低率であった。

#### D. 考察

本研究は、A府またはA市自治体、B社、CクリニックにおいてHIV/STI検査を受検した人を対象に質問調査を実施したものである。この結果を基に訴求性を高める工夫について考察を加える。

受検者の属性分布を年齢別にみると、受検場所によらず、10~30代が全体の約7割を占めており、一般若者男女のHIV/STI感染リスクの高さ(感染不安の实在)が改めて明らかとなった。自治体検査では、「(過去6か月間に)相手からお金をもらってセックスをしたことがある」男女が性交相手と知り合う経緯として、「性風俗店」が約7割と高率を占めているものの「SNSや出会い系サイト」での出会いが約2割あった。そして、10代の女性では「お金をもらってセックスをした」相手と「SNSや出会い系サイト」で出会う機会が特に多く、35.0%を占めていた。また、郵送検査では、出会いの場として「クラブ」と回答した男女が4.9%で20代から30代が大半を占め、男性よりも女性に高率であった。このことから、「性風俗サービス店」、「SNSや出会い系サイト」「クラブ」は、一般若者男女の出会いの場として注視する必要がある、性交相手と出会う経緯には、性別や年齢に一定の特徴があることをふまえた介入が求められる。また、近年では、性風俗店のなかでも店舗をもたず一人営業の形態をもつケースも散見するようになった。このように、性交相手との出会いの方法は多様化し、(自らアクセスすれば)新しい出会いの機会を容易に得ることができる仕組みが広



がっている。この社会の変化に遅れぬよう、健康を守るための規範意識や性感染症に対する感染予防行動を高めるための啓蒙が急がれる。そこで、これら若者男女の出会いの経緯をふまえ「インターネット」や「SNS」を活用した介入が不可欠かつ有効である。ただし、インターネット上には多くの情報が氾濫しているため、正しい情報に確実にアクセスできるシステムの構築が必須である。そこで、今後は受検者が集う「自治体」「病院」「郵送検査 HP」を情報発信の中核とし、そこから「インターネット」や「SNS」を活用して正しい情報へ自由に個別にアクセスできる仕組みをつくることによって、訴求性を高めることが重要であると考ええる。

10～20代の一般男女のうち、(過去に)HIV/STI検査の受検歴がある人は約半数であった。これより、性感染症の予防のためには、リピーターと新規受検者のニーズの違いを考慮しつつ、コンドームの使用と、適切な(定期的な)受検を推奨し続ける必要がある。また、「今後、(自分が)HIV以外の性感染症にかかると思う」と回答した非CSWの男女の割合が25.5%に留まっていることを鑑み、性感染症をより身近に感じられるよう啓蒙することが不可欠である。そこで、本調査の結果において「いずれかの性感染症に罹患したことがある」と回答した女性が35%を超えていたことや30代女性の4割に「クラミジア」罹患歴があったこと等、具体的なデータを示して、感染リスクの高さをよりリアルに伝え、自覚を促すことが先決であると考えた。

まずは、20代女性の「コンドームの所持率」の低さや「(コンドームを)つけて(つけよう)って言えないから仕方ない」という思いを抱いている女性の存在に注目し、女性がコンドームを持つことやコンドームの使用を提案することへの障壁を取り除くことを目指した啓蒙が必要である。そのためには、インターネットやSNSを活用して性感染症の動向を正確に伝え、性感染症の予防としてのコンドーム使用を強く認識できるようなメッセージを発信し、(性交相手と)性を話題にすることを後押ししなければならない。また、「時間がない」「経済的な負担がある」「診断されるのが怖い」と感じる人への配慮として、それぞれのニーズ別に症状や受検方法、治療法などの情報を提供することも重要で

あると考える。

## E. 結論

若者男女の出会いの多様化が進んでおり、HIV/STIの知識偏りから、知識の普及および検査受検勧奨のための効果的な情報発信が喫緊の課題であることを再確認した。

そこで、若者男女の出会いのきっかけを活かし「インターネット」や「SNS」を活用して、プライバシーを確保しつつ受検時等のタイミングを掴んで不足している情報にアクセスできる仕組みを構築することが効果的である。まずは、性感染症の動向を正確に伝え注意喚起することで、性感染症の予防としてのコンドーム使用を啓発する必要がある。そのうえで、「時間がない」「経済的な負担がある」「診断されるのが怖い」などの受検を妨げる理由を和らげるために、受検方法、治療に関する情報をニーズ毎に提供することが重要であると考ええる。

## F. 発表論文等

### 1. 論文発表

本テーマに関する発表論文はありません。

### 2. 学会発表

(国内)

1. 合田友美, 松高由佳, 萬田和志, 中村圭奈子, 日高庸晴: HIV/STI 郵送検査を受検する若者男女の性感染症に対する認識と予防行動の特徴: 第37回日本思春期学会総会・学術集会シンポジウム(2)「性教育の未来を語る」, 2018, 東京.

## G. 引用

なし